

私は準備しなくてはならない、死にゆくことを。

この死にゆくことへの理解、死は恐れるものではなく、永遠への入り口なのだ、そのことを理解し、一個の人間として死に對峙し、死を自然なものとして受け入れるべく成熟してゆくこと。

そのことが人生の後半の課題。

人生への大いなる知恵だ、心の眼を開き、ありのままの、自己を認識するために、我々は生きてゆくのだ。

いま見える、私の考えてきたこと、立証しようとしてきたことは誤りではなかった、私の思考の一つ一つの断片が、大いなる全体の中で整合するのが見える。

人は青年期において元型との対決に挑み、英雄的な精神の冒険において、親から独立した社会人としての地歩を固めようとする、これが人生前半の課題である。

しかしながら人生の後半に我々は再び冒険に出るのだ、これは他者との戦いでなく自らの無意識との戦いに。その旅で自我を成熟させ自己実現してゆくことが、人間の円熟期における目的である、それを助けるものが結合の神秘であり、東洋の知を西洋の知に照らし合わせて理解することなのである。世界を「知り」心が自然界の「意味」へと開かれた時、我々は死が再生への入り口だと認識し。

そしてまた宇宙は機械仕掛けの冷たい物体ではないということを知るのだ。フロイトは心を因果律で説明しようとしたが、私は共時性によって説明することに後半生をかけた。

物質界と精神界は別々のものではない、世界は不可分であり、それは全体として「一なる世界（ウヌス・ムンドゥス）」をなしている。

それを指し示すのが結合の神秘であり、一なる世界の摂理が解き明かされる時、共時性は理解されるだろう。

この世は共時性に満ちている、そのことに気づく時、森羅万象に「意味」が満ちていることに我々は気づく。

共時性の理解はそのまま我々の世界の理解である、共時性への扉が開かれた時、我々はこの広大な宇宙の隅々まで「自己（セルフ）」が満ちていると。世界はそのまま「大いなる自己（セルフ）」の体現であると。

畏れや喜びとともに知るであろう……！！

ユング「心の深層」の構造 講談社 さかもと未明